

【1. チャレンジする意欲の源】

テーマ：竹登り

●「テーマの設定理由」（テーマに関するこどもの興味関心、園の特色など）

当園では年長児の取組として「チャレンジ」があり、その中に「竹登り」があります。毎年、年長児が挑戦し、上っているのを見てきた子供達は、自分たちもやってみたく、前年度から高い興味を持ち、楽しみにしている姿がありました。そこで、垂直に立った竹を自分の体一つで登っていくことにチャレンジしようとする意欲をより育むため、上記のテーマを設定しました。

●活動スケジュール

園庭に竹登りコーナーを常設し、こども達の様子を探る健康体操の先生に体の使い方のアドバイスをもらいながら、4月から運動会までの間のこども達の変化を探る。（カエル足を意識し慣れていく。常設の竹はぶら下がりの動きも体験できるようにする。）

令和6年4月1日～令和6年10月13日

講師：4/22 5/27 6/24 7/8 9/9 10/7（計6回）

●探究活動の実践

<活動の内容>・活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・今年の竹が届くとこども達と一緒に準備をする。（滑りにくくするために雑巾で拭いたり、怪我防止のため竹の節を削り、ガムテープを巻く）「早く登りたい」と楽しみにする姿があった。

・一人一人が目標を持ちやすくするため、色を変えたビニールテープをつけ、一番上には鈴をつける。（下から2mピンク、3m黄色、4mオレンジ、5m青、6m鈴）最初はピンクがなかったが、少しでも登れた間隔を味わえるように途中からつける。

・今年の竹は太くなかなか登ることができない姿がある。「降園後に行く公園の登り棒なら登れるのに」という声からヒントを得、登る感覚を掴みやすくするために細い竹を準備し、園庭に垂直に立て常設する。

・運動会后、年長だけでなく他の学年の子も「登りたい」気持ちを持つ子が多いため、運動会で私用した竹を垂直と斜めで常設する。園庭遊び中に「やってみよう」と裸足になり取り組み、年長が「カエル足だよ」「伸びて～しゅっ」とどの学年も健康体操で馴染みのある動きを意識させる声をかけてくれることもある。登れなくても楽しんで取り組んでいる。

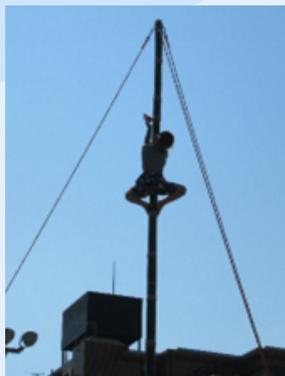
●振り返り

・竹登りに必要な動きの「カエル足」は、健康体操でどの学年もやっている身近な動きなので、竹登りも挑戦しやすい。

・登るコツを掴むため、登る感覚を感じるために細い竹は有効だった。

・竹登りをはじめ運動会チャレンジは、運動会前から年長以外の学年が憧れるものであり、運動会後は年長以外でも竹登りを「やってみたい」気持ちが一番盛り上がる時。このタイミングを逃さずいつでも登れるようにする環境設定が大切だと気づけた。

・まだ登れないけどチャレンジしたい小さい子への補助は足の裏を支えるのではなく、胴体を支えてあげると体の使い方がわかりやすい、と体操講師からアドバイスをいただいた。



【2. 感性を豊かにする活動】

テーマ：造形

●テーマの設定理由

当園では長年、複数の自然物や粘土などを自由を選択し、何を作ってもよいスタイルで造形活動をおこなっています。子ども達は必要な数、物を予め予想し自分のイメージを形にしていけることが得意である様子が見られます。創作する場所や関わる人が変わると、子どもの創作活動、特に実体験の表現活動と、どのような影響や変化があるのか探究したいと思い、このテーマに設定しました。

●活動スケジュール

日常的に立体物を作るコーナーを保育室に設置する。内容は主にドングリ等の木の実や木の枝と粘土で遊べるコーナー。園、森、親子での活動、という異なる場所での活動に毎回同じ素材を準備し、それぞれの場で作った作品に、どのような変化があるのかを探究する。講師：4/19 5/17 5/24 6/7 6/14 7/5 7/12 9/13 9/20 11/15 11/22 1/10 1/17 1/24 2/28

●探究活動の実践

<活動の内容>

《森と室内共通 準備したもの》

毛糸 枝の輪切り どんぐり 松ぼっくり 枝 麻ひも 折り紙 ストロー 竹ひご ボンド セロテープ 両面テープ ドリル 紙粘土 (白 緑 赤 黄 黒←年中長のみ) ※グルーガン (年中長のみ)

(年中以下が対象)

★森での制作時→保護者も活動に参加。

前日に造形活動があり、同じような材料がならんでいたためか、前日に作ったものと同じような飾り物を作る子が多かった。(木の輪切りの上に木の実(どんぐりや松ぼっくりなど)毛糸などを接着。)

★親は子どもの作りたいものを形にしようとする、補助的な関わりをしていた。

★具体的なものを作るというよりは、出来たものに後付けで「これは〇〇。」と言って見立てていた。(紙粘土を丸めたものに飾りをつけ、ハムスターに見立てる。)

コードレスのグルーガンが無かったので、制作物に制限があったかもしれない。

●振り返り

両方の事に共通することは、経験をもとにした再現性だった。森での制作時は特に造形活動での再現、園での制作時は普段の森での活動や日常を取り入れていていた。

森での活動時は親がいたが、親がいることで発展性がなかったようにも感じた。

親がいなかった年中長の活動の方が発展性を感じた。

今回のことは秋～冬にかけての活動だったが、次年度は季節ごと、また日常的に取り入れてみるとどうなるか試してみたい。



【3. 異文化交流活動】

テーマ：新たな世界との出会い

●テーマの設定理由

全国的な傾向だと思いますが、当園でも外国にルーツを持つ子ども達が増えてきている中、子供達の中に、自分の知らない言語を話す友達に対して興味を示し、もっと仲良くなりたい、英語ではどのように言うんだろうという姿がありました。その姿から、「共通言語」となる絵本を通じ、新たな世界を広げていけたらと思い、上記のテーマを設定しました。

●活動スケジュール

令和6年5月1日～令和7年2月

講師：5/9 5/13 6/10 6/21 7/19 9/6 9/12 10/1 10/2

11/6 11/8 1/23 1/24 2/17 2/19 計15回

一日、講師（ニュージーランド出身）と一緒に生活を共にする。講師は英語しかしゃべらない。その中で子ども達の変化を観察する。講師がいらした時は絵本を読んで下さったり、絵本に関連するゲームをして下さっている。その英語の絵本を日常的にクラスに置く。どんな絵本がよいか、どんな場所に置けばよいか、より興味関心を惹くような絵本コーナー設置を探求しつつ、講師からアドバイスを受けながら取り組む。

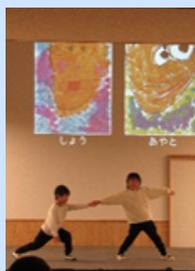
●探究活動の実践

<活動の内容>

- ・英語講師のおススメする英語の絵本を購入した。
- ・英語講師と遊んだり、ご飯を食べたり、活動を共にしていく中で、言葉は理解できなくても「楽しい」「面白い」など、一緒に笑ったり心が通じ合う姿が沢山見られた。
- ・背中に乗ったり絵本を膝の上に乗って読んでもらったりと、子供達の方からスキンシップを求め甘えたりと、英語講師が大好きで受け入れている関わりが見られる。
- ・「Guess How Much I Love You」の絵本を読んだ時は、英語講師の仕草を真似て両手を広げたり、手を伸ばして背伸びをしながら「this much」と表現したり、「I Love you」を手でハートを作って表現することを自ら喜んで行っていた。
- ・「Guess How Much I Love You」の絵本を通じて、子供達同士や子供と教諭が互いに「I love you」を自然と口にする姿が多くなり、大好きな気持ちを互いに伝え合う様子が見られた。
- ・クリスマス祝会では年中組の子供達同士が、互いに大好きな気持ちを「this much」を使って様々な表現方法で表した。

●振り返り

- ・子供達は、日本語を英語に直したり区別するのではなく、感覚で理解しているのではないかと感じる。
- ・英語講師と生活を共にすることで、言葉は理解できなくても心が通じ合う場面を沢山体験し、異文化を受け入れる心が育まれていった。
- ・英語講師のことが大好きな気持ち、子供達同士が互いに大好きな気持ちを、絵本を通じて知った「I love you」という言葉を用いて伝え合っていた姿から、絵本を通してコミュニケーションはもっとできるようになるのではないかと感じる。
- ・英語講師は、絵本に使われている言葉ではなくても、簡単な単語にフォーカスして、読みつつ子ども達とコミュニケーションを取っていきたくて言っていた。絵本を通じて、読み手と聞き手のコミュニケーションを増やしていく方法として、効果が期待されるので、是非その方向性で次年度は進めていきたい。
- ・「I love you」のように子供達が相手に伝えたいメッセージがテーマとなっているような絵本で、コミュニケーションが増えていくか試したい。
- ・購入したがまだ読んでいただけていない絵本もあるので、次年度は読んで絵本の幅も広げたい。



【4. 感情・表現を豊かにする活動】

テーマ：自然の中の音

●テーマの設定理由

当園では園長がギターを弾いたり、音楽講師が森で楽器を演奏することが多くあることから、楽器を触りたい子、興味がある子が多くいます。この姿から、音を楽しむことをもっと感覚的に行うために、森で楽器を自由に鳴らせるコーナーを作り、子ども達の表現の幅を広げ、コミュニケーションや感性を豊かにしていけたらと思い、上記のテーマを設定しました。

●活動スケジュール

講師：5/7 5/14 6/4 9/3 9/10 9/17 10/15

森の音楽家の講師に年間8回、森遊びの日にきていただき、楽器のコーナーを担当していただく。自由に子ども達が楽器を鳴らす様子を保育後に保育者共に振り返りをし、観察して変化に気づいたこと、子ども達が何を感じながら音を鳴らすことを楽しんでいるのかを探る。そして、園庭にも主に竹を用いた音を鳴らして遊べるコーナーを設置して森での活動の様子と園庭での活動の様子の違いを通してその表現活動の違いを探求する。

●探究活動の実践

<活動の内容>

【素材】

・竹 ・棒 ・木の実（どんぐり くるみなど）（・木琴）

→これらをコーナーとして森のベンチと園庭に設置しておく。

【活動中の姿】

始めは講師がリズムカルに竹をたたいていると、興味を示した子どもがやってきて同じように竹をたたいたり、木の幹など他のものをたたいて音の違いを感じたりしていた。講師が鳴らす音の大きさに合わせて子どもも音の強弱をつけるなど、言葉はなくても音を通してのコミュニケーションが生まれた。

そこに他の友だちが加わって同じようにたたいたり、さらにリズムに合わせ跳ねたりなど、身体でも表現している姿があった。またさらに、年長では音をならす人、演技をする人に分かれ劇ごっこのような遊びの展開も見られた。開けた環境だからこそ強制されることなく、自発的な興味が生まれ遊びが広がっていった。

園庭にも同じような素材を設置すると、森と同じように竹やそこにある素材を叩いたりして、音をならすことを楽しんでいった。

●振り返り

自然の中で自由に楽器に触れられる環境で、やりたい人がやりたいタイミングで音を鳴らすことを楽しんでいった。ただ音を鳴らすだけでなく体も自然と動き、さらにそこに友だちも加わり、音を通してのコミュニケーションが生まれていた。森という空間、湿度などで音が感じやすかったり、体の感受性も変わったりすることも、音を楽しむ要素になっているという講師の話しを聞いて納得した。これからも子ども達と自然の中で色々なことを経験しながら、子ども達を感じていることを見守っていきたい。

森の中での楽器遊びの経験は、子ども達の自発的な興味を引き出すということを知った。森にある様々な素材をたたくとそれぞれ音が違うこと、さらには音を通してルールがある遊びが生まれたり、園庭の遊びにいきてきていることに気が付いた。

来年度は自然の中で楽器に触れる経験を通して、虫や鳥の声や風や葉が揺れる音など、自然の音を心と耳で感じ取りどのように表現していくかを探求していきたい。



【5. 制作意欲をかきたてる活動】

テーマ：木

●テーマの設定理由

森遊びに出かけると、木の枝が子供達の遊びの中でよく使われます。当園の園庭にも丸太や木製の物は多数ありますので、木が身近な遊び道具となっているため、木との関わり、遊びを一層深められたらと思い、テーマに設定しました。

●活動スケジュール

5/14 5/21 9/3 9/10 9/17 9/24 10/1 10/8 10/15 10/22 10/29 11/5 11/12 11/19
11/26 1/14 1/21 1/28 2/18 2/25 計20回

森遊びの時に、林業家の講師に頼んで、木を伐倒してもらい、丸太を細切れにして園で造形に使ったり、外遊びに使ったりする。枝や丸太を園庭に準備し、「森のコーナー」を日常的に作る。今までの遊びや製作のアイディアに変化があるのか、そこに製作過程や遊びの中で争いが少ないのか、講師にアドバイスをもらいながら探る。また、素材の特性については講師からアドバイスをその都度いただきながら進めていく。

●探究活動の実践

<活動の内容>

・森で木の伐倒を見学。切った木をのこぎりで切る。それを使ってお店屋さんごっこの製作活動（ピザづくり）
→年少児は伐倒を始めて見る子もたくさんいて、木が倒れる様子に驚いていた。よく知っている講師が大きなノコギリやチェーンソーを使っている姿に釘付けになっていた。その木をまた薄くするためにノコギリを使ってこども達も一緒に木を切った。

木を切っているコーナーの中で、のこぎりをやりたいと順番を待っていた子が2人いた。切っている子が終わり次に誰が切るか決める時に二人ともが「僕が切る」と言って譲らなかった。普段であればお互いに退かずに喧嘩になったり手が出たりする場面になりそうだと思ながらも見守っていると、片方の子が「違う場所で遊んでまっているからいいよ」と譲ってくれる。その子は近くにあった音楽コーナーで楽しむ様子があり、ちょうど終わったところにノコギリも順番が来た。譲ってもらった方も嬉しそうにノコギリを使い、お互いに満足そうにしている様子があった。森で遊んだり自然物を使って遊んだりしていると、空間が広い場所で開放的で、使いたい自然物の材料も探せば新しいものが見つかる。そのことから、こういった言い争いも普段よりも穏やかに解決されていた。

後日、切った輪切りを使って、お店屋さんごっこの品物となるピザ制作を行った。木の丸太を見せると、すぐに講師の名前上がり、一緒に切った木だと嬉しそうにする様子があった。制作をすることを伝えると喜んで取り組む。室内遊びをしながら希望者から制作を始めたが、ほとんどの子が意欲的に、取り組みたいと言っていた。他に使ったものも、自分達で公園へ行き、拾ってきたドングリなどを使用した。伐倒を見た経験や自分たちで道具を使って用意した材料での制作活動はとても意欲的に取り組み、またその制作活動の時間もとても穏やかで楽しい時間となることが分かった。

●振り返り

・森での活動の次の日に、園庭でも同じ遊びができるように。

講師のアドバイスから、森で木の皮むきを楽しむ様子があったので、園でもしてみるのはいかがでしょうかと提案をいただいた。森で親子行事として木の皮むきを楽しみ、園でも楽しめるように次の日に木の丸太を置いた。森で楽しんでいた子も、森ではやっていなかった子も、やりたい子が集まり、夢中になって剥いている子がいた。年少児の中では、遊びの時間の始めから最後まで夢中になっている子もいた。その剥いた皮をお料理ごっこの材料に使う子もいれば、ただ剥く感覚を存分に楽しんでいる子、長く剥がすことを楽しんでいる子など森ともまた違った楽しみ方を見つけている子の中にはいるようだった。

ノコギリで木を切る際に出る木くずもこども達にとってはいい遊びの材料になるようで、森の中で、丁寧に集めて、料理ごっこの材料として使って遊んでいた。森では大きな鍋の中にたくさん集めて『カニチャーハン』とし、それを数名のこどもで共有しながら、使って遊んでいる様子があった。普段は自分の物を大切にしており、他児が触ろうとすると取られてしまうと思うのか、怒る姿が多い印象だが、木を切った場所に行くと、新しい物をもらえると知っているようで、たくさんある木くずをたっぷりとみんなで使って楽しんでいる様子があった。その木くずは、こども達の希望でたくさん持ち帰る。次の日の園庭での遊びにも使う。違うクラスの子もいる中で出してみると、他のクラスの子はあまり興味を示さず、前日に森で遊んだ子が中心となって遊びに使い始める。園庭でもお鍋やお皿に入れて、お料理ごっこの材料として遊ぶ。この日はカニチャーハンではなく『かき氷』として楽しんでいた。園庭では前日とは変わってそれぞれが自分の物として使う姿がある。前日のように一緒に使っていた子たちも、木くずの中に、水を入れたい子、水を入れたくない子それぞれで、言い合いも少し出てきていた。お互いの気持ちがある中で見守っていると、前日一緒に遊んだ楽しかったことを思い出したのか、「水を入れてもいいよ」と承諾してくれる様子もあった。森と園とで同じものを使って、場所が違うことで、遊びに変化があった。森では沢にカニがいることからカニチャーハンに見立てて遊び、園庭ではその日の気候からかき氷となっていたことから、こども達がそれぞれの環境を感じながら遊びの発想につなげているのを感じられた。また、それぞれの関わりも、同じ友達でも、場所が違うことで、昨日はうまくやり取りができていたようなことも、なかなかうまくいかないこともあると感じた。ただ、その中でも、森での譲ってもらった経験や一緒に遊んだ楽しかったことは覚えているようで、それを思い出しながら過ごしているのを感じられた。



【6. アフォーダンスとみられる活動】

テーマ：川と石

●テーマの設定理由

森遊びの後、お弁当を食べる場所として成木地区にあるログハウスを賃借しています。夏は川遊びもするその場所で、お弁当を食べた後、ほとんど全員、石を投げて遊びたがります。投げた石の大きさによって水しぶきの大きさも変わり、とても楽しそうな様子がみられます。そこで、石に関して違う遊びの提案をしてさらに川原での遊びを豊かにできないか、と思い上記のテーマに設定しました。

●活動スケジュール

4/16 4/30 5/7 5/14 5/21 5/28 6/4 6/11 6/18 6/25 7/2 7/9 7/16 9/3 9/10
9/17 9/24 10/1 10/8 10/15 10/22 10/29 11/5 11/12 11/19 11/26 1/14 1/21
1/28 2/4 2/18 2/25 計32回

河原にある石、道端にある石、公園の石、化石の石、その場所や場面によって石の使われ方は色々だと思います。

日常の中で「石のコーナー」を設置し、こども達の様子をよく観察したり、話しを聞いてみたりする。そのうえで、なぜ川に石を投げたくなるのか、を探求する。

●探究活動の実践

<活動の内容>

あまがさすの森で遊んだ後、成木地区にあるログハウスへ移動し、そこでみんなで昼食（お弁当）をいただく。その後のバスに乗って帰園する時間までの間、河原へ行く時間がある。そこへ行くほとんどの子が石を投げて遊び始める。目玉シールを持っていき、石に目をつけて遊ぶことを楽しむ活動や石積み等も行い、石を投げて遊ぶことからあえて気をそらそうとしてみた。※園庭に石のコーナーを作ろうと化石や丸い石などを置いたが、興味は示されなかった。

●振り返り

・川に石を投げたくなるのはどうしてか。

こども達が川に行くといろんな形の石を見つけて投げ入れることを楽しんでいる。積み上げたり色々な形を見つかけたり、目玉シールを石に貼って楽しむことを提案して一時楽しんだとしても、いつの間にか石を投げ始める。その中で気づいたことは、小さな石よりも、大きな石を探して投げ入れようとする姿がたくさんあったことだ。自分では持てないようなものは保育者をお願いして投げ入れてもらおうと要求する子もたくさん見られた。そうして楽しんでいる子（3歳児）にどうして大きな石を選ぶのか聞いてみた。「大きな石だと水がいっぱい跳ねるから！」との返答だった。小さい石だと水しぶきが少なく、大きな石は沢山の水しぶきが起きることを発見していた様子を見て、こども達は自分の行動に対しての効果が大きい方をより楽しいと感じることから大きな石を選んでいると分かった。また、どうして大きな石だと、たくさん水が跳ねるのかを問いかけてみたが、年少男児は、まだ重さのことなどは発見していないようで、「わからない」との返事が返ってきた。年長児は石の大きさと水しぶきの大きさが比例関係にあることをなんとなくわかっていたようなので、これから様々な遊びの経験をする中で気づいて行くのかもしれない、と思った。

